

JRECO 通信

No.38



一般財団法人 日本冷媒・環境保全機

引き続き、一般財団法人 日本冷媒・環境保全機構（JRECO）として、会員の皆様に知っていただきたいこと等を『JRECO 通信』としてお届けします。

JRECO は、今後もフロン排出抑制を始めとして冷媒管理の適正化に向けた取り組みを積極的に推進し、地球温暖化対策への貢献を目指してまいります。

I. フロン対策格付け表彰式・懇親会を開催

【1.概要】

JRECO は、昨年に引き続き 2025 年 5 月 26 日に東京都港区の機械振興会館で「フロン対策格付け表彰式・懇親会」を開催しました。

本イベントは、JRECO が実施している『フロン対策格付け』において最高評価である A ランク評価を受けた企業様に表彰状を授与し、併せて情報交流の場を設けることで、フロン類機器管理の適正化に向けた取り組みをさらに推進することを目的としています。

当日は、環境省・経済産業省や東京都など関係行政機関からご来賓をお迎えし、全国から 38 社がフロン格付け A ランク企業として表彰されました。

表彰式に続いて行われた懇親会では、参加者同士が活発な意見交換を行い、フロン排出抑制に向けたさらなる更なる連携強化の機運が高まりました。



【2.フロン対策格付けとは】

「フロン対策格付け」は、プライム上場企業 1641 社を対象に、統合報告書や SDGs レポート、ESG データなどの公表資料を分析し、フロン排出抑制法の対応状況や算定漏洩量・簡易点検・定期点検などの実施状況の記載をもとに、JRECO 独自の視点と基準で事業者ごとの取り組みや対策の状況を格付けし、当機構のホームページ等で公表することで、フロン類機器管理の適正化を図ることを目的とした取り組みです。

この取り組みは、2021 年度以降 4 年間にわたり実施してきており、格付けは、A～E の 5 段階で評価され、最高位の A ランクはフロン排出量・排出抑制対策の状況が特に優良な事業者に与えられます。

A ランク企業は回を重ねるごとに増加し、これまでに

- ・第一回：16 社
- ・第二回：49 社
- ・第三回：76 社
- ・第四回(今回)：94 社

と、着実に認知と評価が広がっています。今回は、その中から表彰式に 38 社がご参加くださいました。

【3.表彰式の模様】

■ 式典

開会にあたり、JRECO 是常博 理事長より挨拶があり、続いて環境省 地球環境局 地球温暖化対策課 フロン対策室 香具輝男 室長より、ご来賓代表としてご挨拶をいただきました。



続いて 38 社に対して表彰状が授与され、表彰企業を代表して、積水ハウス株式会社様より「法令順守のため全社一丸となって冷媒の適正管理に取り組んでいる。今後は JRECO の冷媒管理システム「RaMS」をグループ会社にも展開していきたい」とのスピーチがありました。



■ご来賓祝辞

ご来賓のうち東京都環境局 環境改善部 環境保安課 課長 西脇勇二様より、祝辞を頂きました。
フロン排出抑制に向けた取り組みへの激励のお言葉を頂きました。



■基調講演

経済産業省 化学物質管理課 大本治康 課長より、「フロン政策における最近の動向と今後の展開について」と題した基調講演が行われ、制度改正の動向や今後のフロン対策のあり方について幅広い視点からご講演をいただきました。その中では、JRECO のフロン対策への取り組みにも言及がありました。



■ 懇親会

式典後の懇親会には、A ランク表彰を受けた企業を含め約 100 名が参加し、業種を超えた活発な意見交換が行われました。参加者間の交流を通じ、フロン排出抑制への相互理解と連携強化が図られ、今後の取り組みの一層の発展が期待されます。

【4. 今後の展望】

JRECO は、限られた HFC 冷媒を適切かつタイムリーに管理していくために、専門人材の育成（資格認定事業）や冷媒管理システム「RaMS」の導入促進に注力しています。今後も、関係機関・団体・企業の皆様と連携しながら、社会からの期待に応える取り組みを進めてまいります。

II. 玉川上水を歩いてみませんか。（シリーズ 2：玉川上水駅から吉祥寺駅編）

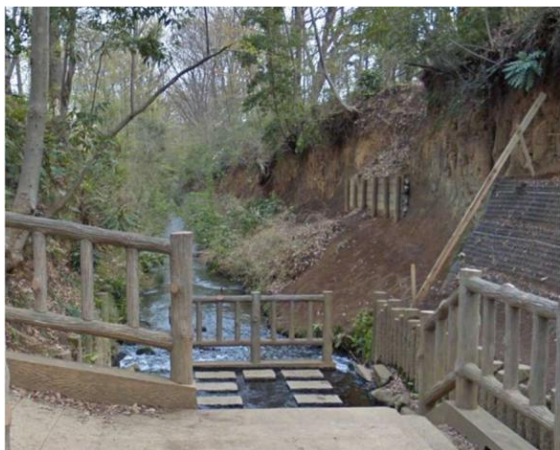


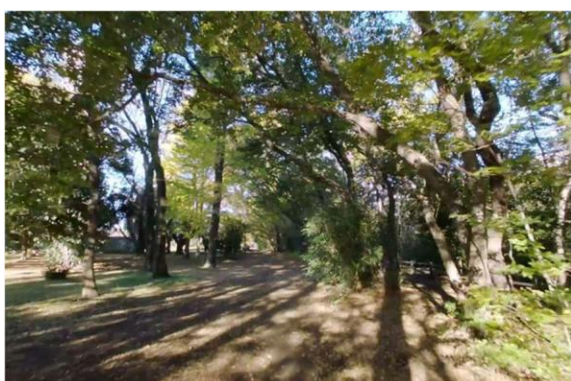
今日のコースは玉川上水駅から吉祥寺駅までの約 15km となります。あちらこちら寄り道、見学をすると 20km 弱となるかもしれません。立川市、小平市、国分寺市、小金井市、武蔵野市、三鷹市と東京 6 市を歩くことになります、それでは元気で歩きましょう。



玉川上水駅は西武拝島線と多摩モノレールが乗り入れています、に新宿からは中央線立川駅でモノレールに乗り換えて 40 分程度で到着します。それほど、遠くはありません。ご家族でのピクニック、友人たちとの散歩の会などでお楽しみください。

駅名の通り、駅前を玉川上水が流れています。この辺りの玉川上水は石垣できれいに整備されています。さて、それでは下流に向かって歩きましょう。駅から 5 分ほど行くと、東京都水道局小平監視所があります。この監視所で羽村から取り入れた水は上水道処理されます。地図にあるように、羽村からの水はこれ以降の下流には流れていません。監視所までの水路がきれいに整備されていたのも上水道に使用するからでした。つまり、正確いうと玉川上水は、この地点で分断していることになります。これより下流を流れる水は昭島市の多摩川上流再生センターから送水されて、ここで玉川上水に再放流されたものです。その放流の場所のはかつての川底に「甦る水の滝」として演出されています。この滝へは遊歩道で、元川底まで行くことができます。この場所は川底から玉川上水を見ることができる唯一の場所です。ここからの下流は上水道にはもう使用しないので、昔のままの玉川上水がそのまま残っています。第一話でも触れましたがこの監視所以降の下流は、平成 15 年に歴史環境保全地域として、国の史跡に指定されています。





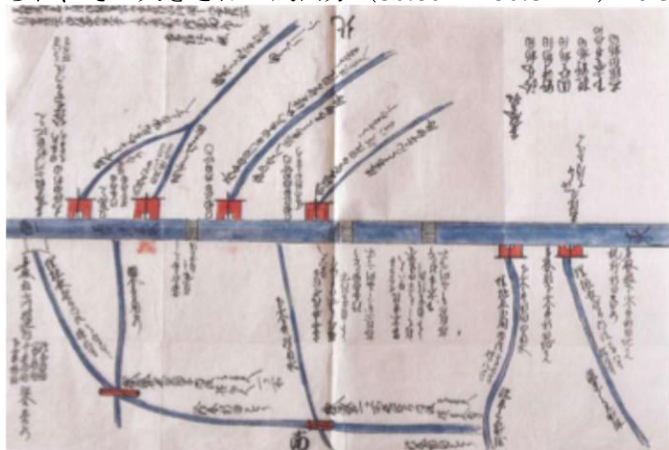
この辺りから一橋大学小平キャンパスまでの約5kmはとても素晴らしい景色で、きれいに整備された自然、東京にもこんな場所があるのかと感心します。この区間は本日のコースでは玉川上水を満喫できる最高の場所とといえるでしょう。長い距離が苦手な方でも、この区間だけでも天気の良いときにご家族でお出かけされてはいかがでしょうか。そして、下流に向かって左手方向（玉川上水の北側）を歩かれることがお勧めです。



さて、しばらく下流に向かって進むと、小川分水があります。案内には以下のように書かれています。

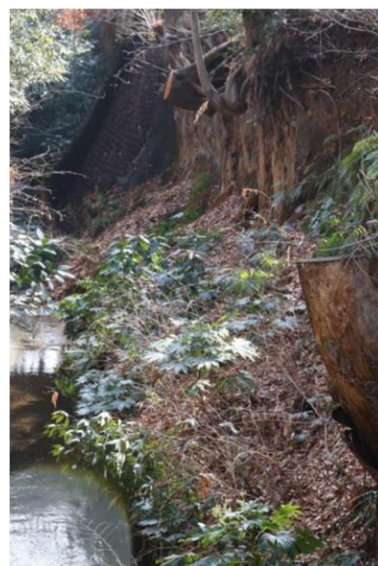
「小川分水と新田開発」承応2年（1653）の玉川上水の開通は、江戸市民の喉を潤しただけでなく、武蔵野台地をも活気づけました。玉川上水からの分水によって飲み水が得られ、それまで原野だった場所が開拓されて人が住めるようになったのです。

小川村の新田開発は明暦 2 年（1656）に許可されて、最初におこなわれたのが小川分水を掘る工事でした。小川村地割図（宝永 2 年頃）に書かれているように、分水口は現在の東小川橋付近に設けられ、その大きさは一尺四方（30.3cm×30.3cm）でした。



玉川御上水分水絵図面
（小平市中央図書館蔵）

寛政 3 年（1791）の頃の玉川上水は 33 の分水（上水も含めて）が多くの村々に水を供給していました。



一橋大学小平キャンパスに掛けて、玉川上水の北側には大学・学校が林立しています。最初に目に入るのが、朝鮮大学校、そして武蔵野美術大学校、白梅学園大学校、創価高校、津田塾大学、一橋大学小平キャンパス、国土交通大学校、関東管区警察学校などが約 3km に続きます。

一橋大学を過ぎたあたりから玉川上水の両側が車道となり景色はハイキングコースから郊外の風景に変わり、両堤には多くの桜木が目にはいります。

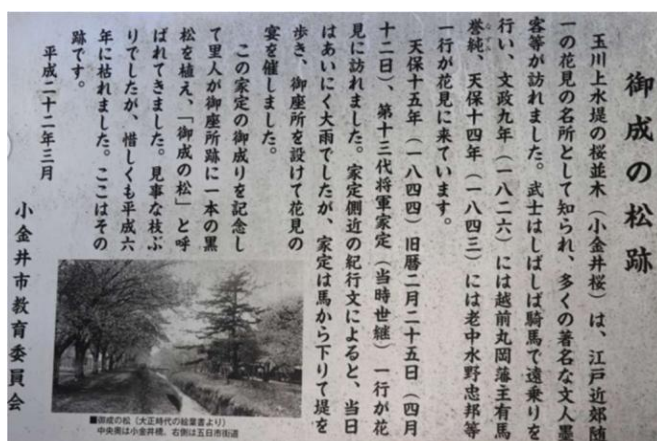
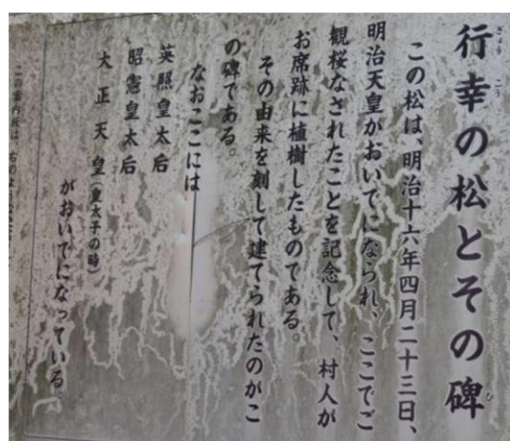


小金井桜は、江戸時代中期の元文2年（1737年）に、江戸幕府の新田開発の一環として植樹されたヤマザクラの並木が起源です。この桜並木は、奈良県の吉野山や茨城県の桜川から取り寄せた苗木を、府中押立村の名主であった川崎平右衛門が中心となり、玉川上水の両岸に植樹したものです。その後、嘉永・安政年間（1848～1859年）に大規模な補植が行われ、桜並木は「千本桜」と呼ばれるほどに成長しました。この美しい景観は、江戸近郊の桜の名所として広く知られるようになり、多くの文人墨客が訪れ、詩歌や絵画に描かれました。特に、浮世絵師の歌川広重は、小金井桜を題材にした作品を多く残しています。

明治22年（1889年）には、甲武鉄道（現 JR 中央線）が開通し、花見客が増加しました。地元の農家は花見茶屋を営み、地域経済も潤いました。さらに、大正13年（1924年）12月9日には、玉川上水堤の桜並木が国の名勝に指定されました。

しかし、戦後の開発や環境の変化により、桜並木は衰退の危機に直面しました。現在、小金井市では「名勝小金井（サクラ）復活プロジェクト」を推進し、桜並木の保護・再生に取り組んで、次の100年に向けて貴重な文化遺産を継承することを目指しているそうです。

また、江戸時代は近郊随一の花見の名所として知られ、著名な文人が訪れ、武士は騎馬で遠乗りを行いました。天保15年（1844）旧暦2月25日（4月12日）、第十三代将軍家定が花見に訪れました。この将軍の御成を記念して里人が御座所跡に黒松を植え「御成の松」と呼んでいました。その御成の松跡は小金井橋の東側にあります。さらに、その橋の西側に明治天皇が小金井堤の桜を觀賞された記念の行幸松（みゆきまつ）の松と碑があります。1883年（明治16年）明治天皇は午前8時30分に赤坂仮皇居を馬車で出発し、11時頃に小金井村に到着され、小金井橋北詰に天幕を設けて休憩された後、小金井橋から貫井橋までの堤を巡られたとのこと。また、小金井橋のたもとには「名勝 小金井桜」の碑があります。





歌川広重 不二三十六景の「武蔵小金井堤」



歌川広重 名所江戸百景「玉川堤の花」

小金井橋を通る小金井街道を 200m ほど北上すると、有名な小金井カントリー倶楽部があります。小金井カントリー倶楽部は、1937 年（昭和 12 年）に開場した歴史あるゴルフ場です。創設者の深川喜一氏は、当時のゴルフが貴族や華族階級に限られていたことから、庶民が楽しめるゴルフ場を目指し、米国の著名なプロゴルファー、ウォルター・ヘーゲンに設計を依頼しました。戦後は進駐軍に接収されましたが、1954 年（昭和 29 年）に自主運営を再開し、名門コースとしての地位を築いているとのこと。同倶楽部は、東京都内のゴルフ場ランキングで 1 位に位置づけられており、会員権の価格が日本一高いとも言われています。

小金井カントリー倶楽部の南側に隣接しているのが小金井公園です。ちょうど、小金井橋から 300m 位玉川上水沿いに五日市街道を東（下流）に歩くと、公園の入口があります。ここに来るのは、おそらく 60 年振りです。小学校の遠足で来たきりなので、初めてのようなものです。そういえば、当時とは周りの景色は全く違います。当時は、国鉄武蔵小金井駅から田圃の道を歩いたものでした。中央線で三鷹駅を過ぎると、線路の両側は田圃だらけでした。特に武蔵境駅以西はまるで田舎でした。田圃の真ん中に「白元」の看板があったのを未だに覚えています。この水田地帯も玉川上水の分水の賜物だったのでしょう。

さて、小金井公園は、東京都小金井市および周辺の市町にまたがる広大な都立公園で、その歴史は 1940 年（昭和 15 年）に計画された「小金井大緑地」に遡ります。この計画は、紀元 2600 年記念事業の一環として立案され、翌 1941 年 12 月までに約 90 ヘクタールの用地が取得されました。戦後、これらの土地の一部は農地解放により失われましたが、現在でも約 80 ヘクタール、日比谷公園の約 5 倍、上野恩賜公園の約 1.5 倍に相当します。1954 年（昭和 29 年）1 月 14 日に「小金井公園」として正式に開園されました。

開園当初から、園内にはヤマザクラ、サトザクラ、ソメイヨシノなど約 1,700 本の桜が植えられ、現在では桜の名所として有名です。



お勧めは園内にある「江戸東京たてもの園」です。入場料は一般が 400 円、65 歳以上が 200 円。園内には江戸から昭和初期にかけての歴史的建造物 30 棟が移築復元され、広さは約 7 ヘクタールと広く、興味深い建物を見て回ると 1 時間では足りないでしょう。特に、青山から移築された高橋是清邸は印象的です、なにせ 2.26 事件の目撃者ですから。



高橋是清邸

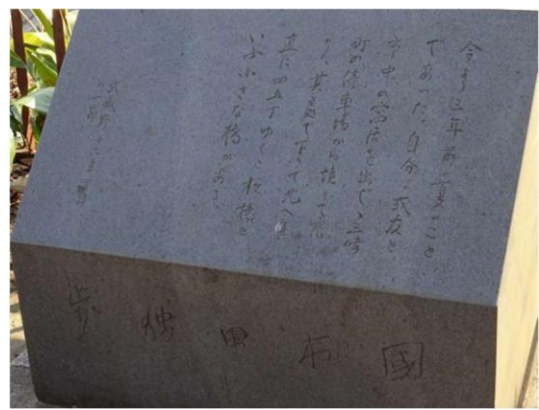


伊達家の門





さて、「江戸東京たてもの園」の見学を終えて、玉川上水の旅を続けましょう。公園の東側の出口より、五日市街道に戻ります。公園出口から 300m ほど歩くと、境橋で道が三叉路となり、玉川上水沿いの桜通りを進みます。5分ほど歩くと、玉川上水にかかる桜橋のたもとに「国木田独歩の文学碑」が見えて来ます。小説『武蔵野』の第六章の書き出しに「今より三年前の夏のことであった。自分は或友と市中の寓居を出でて三崎町の停車場から境まで乗り、其処で下りて北へ真直に四五丁ゆくと桜橋という小さな橋がある」にちなんだ文学碑だそうです。



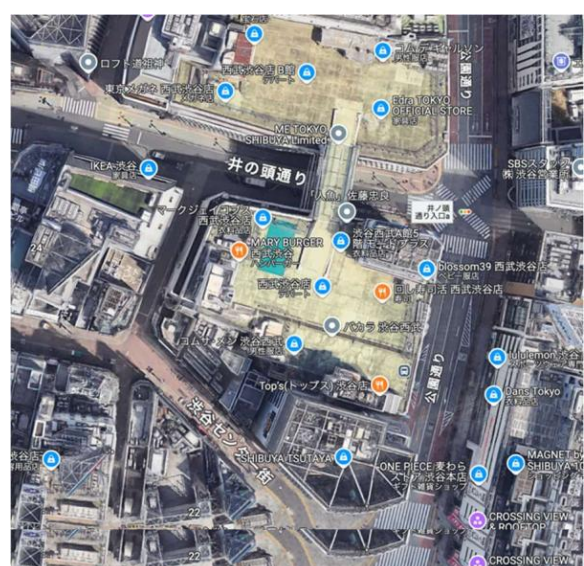
東京都水道局 玉川上水が国師弟史跡の案内と国木田独歩の文学碑の紹介

桜橋のたもとにある文学碑



左手：玉川上水 桜通りを挟んで 右手：東京都水道局 境浄水場

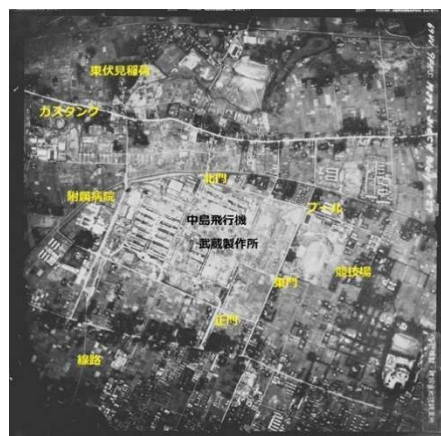
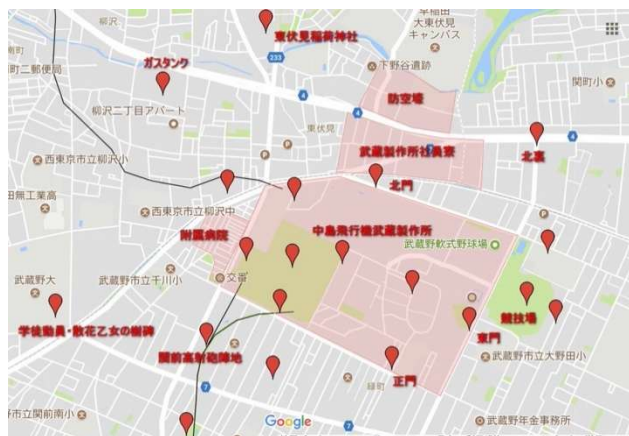
以前から地図を見ていてこの境浄水場のことが気になっていました。調べてみると、やはり、この浄水場は玉川上水の水を取水・浄化し東京西部の市町村へ供給していたそうです。開設されたのは大正13年（1924）。さらに、興味深いことに、井の頭通りがこの浄水場の北側を起点とし、吉祥寺駅の南側をへて渋谷の西武デパートの先の公園通りで終点となっています。渋谷までの途中で和田堀給水場をぐるりと半周しています。以前は、この道を私の近所ではみな「水道道路」と呼んでいたの、水道道路の方が馴染み深いです。



世田谷区大原にある和田堀給水場（井の頭通りが給水場の外を回り込んでいる）

井の頭通り終点の渋谷

井の頭通りが「水道道路」と呼ばれていたのは、調べてみると境浄水場からの送水管が地下に埋設されていたためとのことです。武蔵野市の境浄水場で浄水され世田谷区大原の和田堀給水場へ供給していたからだと思います。それでは、散歩に戻ります。境浄水場は750m×250mと大きく桜橋から浄水場の敷地が始まり、次のいちょう橋まで続いています。そして、いちょう橋には、橋に並行してかつての中島飛行機への軽便の引き込み線専用橋（復元）が架かっています。かつて、中島飛行機武蔵製作所は武蔵野市の中心に位置したエンジン工場でした。エンジン製造するための鋳型の砂を、軽便で武蔵境駅から工場内に引き込んでいました。ところで、JR 武蔵境駅から多摩川の川縁にある是政駅まで7.8kmを運行している西武多摩川線をご存じでしょうか？この路線はかつて、多摩川で採取した砂利を運ぶための線路だったのです。そして、途中にある現在の国際基督教大学（ICU）のあたりで、砂利を粉砕し砂にして武蔵境駅にも運んでいたそうです。その砂を軽便鉄道に移し替えて中島飛行機武蔵製作所へ運んでいました。



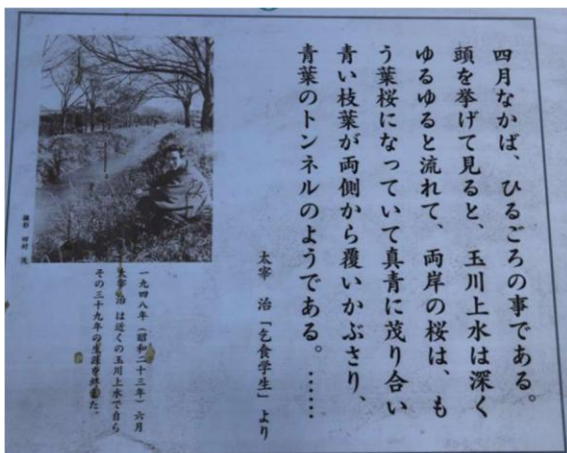
<中島飛行機株式会社>

中島飛行機株式会社は、1917年（大正6年）から1945年（昭和20年）まで存在した日本の航空機・航空エンジンメーカー。通称は中島（なかじま）。創業者は中島知久平。エンジンや機体の開発を独自に行う能力と、自社での一貫生産を可能とする高い技術力を備え、大東亜戦争終戦までは東洋最大、世界有数の航空機メーカーであった。当時の戦争においての主力であった航空機を造るトップメーカーであったため、この付近には空襲も計9回もあった他、日本本土初の空襲では米軍側からはターゲットとされました。中島飛行機は、海軍技術将校だった中島知久平が、1910年フランスの航空界を視察し、研究を開始、第一次大戦で飛行機が実用化されて間もない1917年、海軍を退官、故郷の群馬県太田市に飛行機研究所（翌年、中島飛行機製作所と改名）を作ったのが始まり。

陸軍の隼(5751機)、疾風(3500機)が有名だが、後には海軍の月光(477機)、天山(1266機)、彩雲(399機)、橘花(ジェット機)も生産している。ゼロ戦のエンジン、栄も中島製である。幹部だけが正門からの出勤だったが、一般従業員5万人は別の入口から通った地下道というのは、上空から米軍に見られないようにとの配慮だった。

西工場と東工場はそれぞれ海軍向けと陸軍向けのエンジンの生産を行っていた。

さて、目的の吉祥寺駅までは三鷹駅を通り越して2.6kmとなります。もう少し、頑張りましょう。桜通りを玉川上水沿いに10分ほどで三鷹駅に到着します。玉川上水は三鷹駅の真下を通り越して流れています。三鷹駅から200m玉川上水の南側（風の散歩道）を歩くと太宰治の碑が見えて来ます。さらに下流100m進むと太宰治入水の地として玉鹿石が置かれています。現在は景観のために放流して流れも緩やかな玉川上水ですが、第一話でも触れましたけど昔は落ちたら助からない川でした。



太宰碑



入水の地にある玉鹿石

太宰治の墓は入水場所から南西に直線で約800mにある禅林寺にあります。禅林寺には森鷗外のお墓もありますので、まだ余力が残っているのでしたら、せっかくなので参拝に行かれては如何でしょうか。禅林寺は三鷹八幡神社に隣接しており、明治維新後に廃仏毀釈で神社と仏閣が分離されたと思います。明治維新前は大きな神社だったのでしょう。

A photograph of a traditional Japanese building, possibly a restaurant or shop, featuring a tiled roof and a series of red lanterns hanging along the street level. The building is situated on a street corner, and several people are visible walking on the sidewalk and standing near the entrance. The scene is captured during the day, with a clear sky and some trees visible in the background.



今回は買い物以外のバンコクと、滞在中の数少ない観光地巡りをした時の話をさせていただきたいと思う。

バンコクに関しては多くの情報があふれているので、私が行ったところや、私の視点で感動したところを挙げさせていただく。

ここには全長 47 メートルの涅槃仏があり、タイ古式マッサージの総本山であることなどの理由で外さなかったのだと思う。



15



写真1 ワット・ポーの涅槃像1



写真2 ワット・ポーの涅槃像2

次にバンコクの豪華なホテルに関して。バンコクの宿泊はそれこそバックパッカー的な宿から最高級なラグジュアリーホテルまで千差万別だが、やはりタイのホスピタリティの体験を目的とするならラグジュアリーホテルがお勧めである。チャオプラヤ川の河畔のオリエンタル、ペニンシュラ、シャングリラ、ルンピニ公園近くのデュシタニ、バンヤンツリー、スコタイ、スクンビット通りに面したシェラトングラndeなどは当時からよく名前があっており、それぞれに人気を博していた。例えば日本人が多く住んでいたスクンビット通りのシェラトングラnde



写真3 ワット・ポー

は日本人のファンが多く、オリエンタル(現在はマンダリン・オリエンタル)は1876年創業のタイで一番古い歴史あるホテルで、サマセット・モームが定宿としていたり、三島由紀夫が小説『暁の寺』を書きあげたホテルとしても有名である。ちなみに2024年9月に発表があったThe World's 50 Best Hotels 2024ではタイのカペラ・バンコクが世界一に選ばれたとのことだが、このホテルはチャオプラヤ川沿いのエリアで、ここら辺が20年前同様に人気エリアという状況は変わっていないことが解った。

今回ラグジュアリーホテルと呼ばれるこれらを話題に出したのは、当時これらのホテルのいくつかには『ルーフトップバー』と呼ばれる屋上のバーが併設されていて、ガラスや柵といったものが無く、当時の自分の感覚とはかけ離れていたことに衝撃を覚えたからである。どのホテルのルーフトップバーに連れていかれたか覚えてないし、写真も残っていないのだが、飛び降りようと思えば(思わなくとも、チョットふらっとすれば)地上へ真っ逆さまだったと思うし、もしかしたらカクテルやつまみが地上に降ってくるようなこともあったのではないかと思う。東京タワーの150m展望台より上の位置のガラスも柵もない所で酒を飲むといった感覚にとっても驚いたのと、(一方では冷静に)色々な法規制的にも日本ではあり得ないと思った記憶があり、とにかく驚いたことを覚えている。

現在ネットを見ると 60 階超のケースも多いようで、20 年前に比べ、一層進化しているようである。

《アユタヤ遺跡》

アユタヤは日本の教科書にも登場し、日本人にも馴染み深い世界遺産と思う。『アユタヤは 14 世紀から 18 世紀のアユタヤ王朝の首都として栄えたが、ビルマの侵攻により衰退。交際都市として繁栄したアユタヤには日本人町もあり、山田長政などが活躍した』といった内容が教科書の定番と思う。華やかな記述のある反面、ガイドブックなどにある「首のない仏像」や「木の根に覆われた仏頭」といったものも有名な話である。(補足: これらはワット・マハタートという 14 世紀に建立されたアユタヤの中心寺院にあり、ここがアユタヤ滅亡に繋がるビルマ軍の猛攻撃にさらされ、その際に金箔に包まれた仏像頭部が戦利品として奪われ、ある仏頭はそのまま放置され木の根に覆われてしまったと伝わっている)

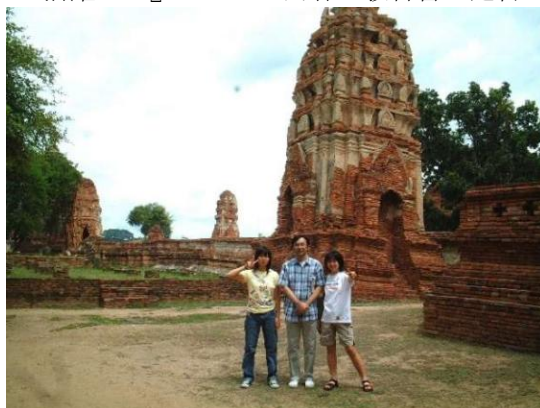


写真 4 アユタヤ遺跡での一枚

実際にアユタヤの遺跡群に足を踏み入れ、破壊の限りを尽くされたと思える赤茶けて崩れ落ちたレンガや、土台だけの建物などに囲まれると、後者(国際都市として繁栄したアユタヤ)より前者の“戦争の爪痕”のほうが強く伝わってきて、とても「首のない仏像」や「木の根に覆われた仏像」にカメラを向ける気にはなれなかった。

(写真は 2005 年に家族とアユタヤを訪れた時の一枚)

《ホアヒン》

ホアヒンはタイ湾をはさんでちょうどシラチャ・パタヤの反対側に位置する王室ご用達の保養地のようなところで、日本で言えば葉山や那須といったところである。ここは男性 4 人で行ったが、ゴルフをするわけでもなく、バンコクほど騒がしくなく、ほとんど日本人(というより東アジア人的な人)を見かけることもなく、南国風の異国を味わいながらただひたすら酒を飲んだ記憶しかないリゾートである。

海辺の人気のレストランでひたすら飲むわけだが、レストランといっても皆さんの想像とは程遠いもので、ホアヒンでも人気のシーフードレストランという触れ込みだが、正直この回の最初に書いたバンコクのラグジュアリーホテルとの落差は想像を絶する。この落差もまた楽しいものである。参考までに昼と夜の 2 枚の写真を載せておく。(実はシラチャにも“シーサイドレストラン”と呼ばれる海鮮メインのレストランがあるが、タイは概して海辺の食事処は極めておいしい)

ホテルはさすがに『シェラトン ホアヒン リゾートスパ』という、結構いいところに宿泊した。ここには西洋人の家族連れや老夫婦が多く宿泊しており、バンコク辺りなら必ず和式や中華式の朝食があるのだが、ここには無かったことを鮮明に覚えている。

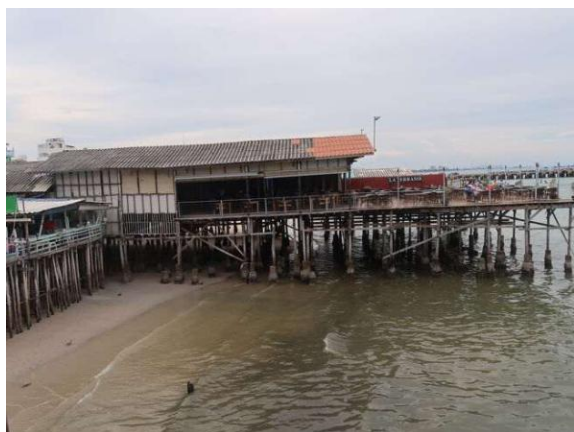


写真5 昼のシーサイドレストラン



写真6 夜のシーサイドレストラン

《カンチャナブリー》

カンチャナブリーはバンコクの北西 120km くらいのところにあり、風光明媚な自然と多くの遺跡がある町だが、その名前が有名になった理由の一つは映画『戦場に架ける橋』の舞台となったことである。映画のタイトルになったクワイ川にかかる鉄橋(捕虜の労働力を使い日本軍が敷設したとされる全長約 322 メートルのクウエー川鉄橋)は今でも存在し、歩いて渡ることもできる。付近には連合国軍の共同墓地などもあり、バンコクから日帰りのツアーなども多く、おすすめのスポットである。



写真7 鉄橋を歩いて渡る



写真8 鉄橋全景



写真 9 泰緬鉄道の車窓から

写真の記録によると、ここへは 2005 年 3 月 5 日に行っているようで、友人と二人の日帰りツアーだった。自分は泰緬鉄道に乗った記憶は全くなかったが、友人によると木の椅子で尻が痛かったとのことだし、車窓からの写真も残っていたので乗車したことは間違いないようである。

第四回はここまでとし、次回の第五回は健康診断や不動産登記などのアイテムを紹介していきたいと思う。

To be continue 次号へ続く

お楽しみいただけましたでしょうか？

JRECO 通信は不定期刊行ではありますが、次回もご期待願います。

JRECO 通信のバックナンバーはホームページに掲載中

https://www.jreco.or.jp/jreco_news.html